

サオ語の小辞について

新居田 純 野

Particles in the Thao language(Taiwan)

NIIDA Sumino

abstract

Thao is the language of the native Thao people residing in Taiwan's central region, and belongs to the Austronesian family of languages. In 2001 the Thao people were officially recognized by the Taiwanese government as the 'tenth aborigine' in Taiwan. Their traditional language is one of the 'languages on the verge of extinction (endangered languages)' with extremely few speakers.

This paper is concerned with particles in the Thao language. I have analyzed the function of four particles, *ti*, *a*, *tu*, and *sa*, through the handwritten folk tales in Thao language that the speaker personally recorded by using Japanese Kana.

Particle '*ti*' is placed on a personal noun. It shows respect to the person. Particle '*a*' connects multiple nouns. It is approximate to Japanese particle 'の' in the usage. The particle '*a*' shows several relationships between the two words. Some of the relationships include possession, belonging, restriction of place or kind, producer and product, and kinship. In addition, the particle connects verb and noun, adjective and noun, demonstrative and noun, and quantifier and noun. In the case of connecting verb and noun, the relationship is that of subject and predicate or object and predicate. In the case of connecting adjective and noun, it shows attribution to a thing or a person. Particle '*sa*' precedes a material noun. It marks subject, object, and existence. Particle '*tu*' was analyzed as an accusative case marker or marker of the nominalized clause in preceding studies. But it marks also sentence outside the nominative clause. Furthermore, there are various sentence structures in which '*tu*' co-occurs with negative words. In those cases, the negative words modify the sentence which is marked with '*tu*'. In addition, '*tu*' precedes time words or place words, which modify the sentence which is marked with '*tu*'. Essentially, '*tu*' marks sentence, clause, and phrase.

1. はじめに

サオ語は、台湾中部に居住する原住民サオ族の言語で、オーストロネシア語族に属する。サオ族は、中華民国台湾政府によって第十番目の「原住民」として2001年に公認されたが、サオ語を話す話者が現在では非常に少なくなっており、「消滅の危機に瀕した言語」の1つとなっている。

本稿は、80代のサオ語話者が、サオ語表記に日本語の仮名を使用して記述したサオ族の物語やこれまでに筆者が行ってきた現地調査によって得られた多数の用例を資料として、サオ語における小辞“*ti*”“*a*”“*sa*”“*tu*”について、その機能を明らかにすることを目的とする。

サオ語の小辞には、語と語の連結の機能を持つ *a*、人名詞の前におかれる *ti*、物名詞の前におかれる

sa、また、名詞の前におかれたり、動詞の前におかれたり、あるいは、否定辞の後ろにおかれたりして、そのおかれる位置が様々であり、かつその機能がはっきりしない *tu* がある。

2. 小辞とは

小辞とは、助辞などの短い文法上の付属語をさし、particle と訳されるものであるが、逆に particle を日本語に訳すと「助詞、小詞、小辞、助辞、不変化詞」などとなる。ところで、サオ語における小辞は品詞に関係しない部分であり、語形変化をしない不変化詞である。その小辞の持つ機能は後接する語を限定するものであるのか、また、語に前接して他の語との関係を表すのか、あるいは、文レベルのものを限定する働きがあるのか、さらには、どのような意味的な機能を持つのかなど、これまでの研究では十分明らかにされたとは言いがたい。しかし、文法的には、実辞の間に入ってその文法的な役割を助ける機能を持つものと考えて間違いはないだろう。サオ語の小辞は、それ自体は実質的な意味内容を持たないし、何らかの観念を示す実辞とは異なるものであるが、実辞と共に起することで初めて何らかの意味や働きをなすものである。サオ語には過去や状態や移動、場所等を表す接辞が多数あるが、ここで取り上げる小辞は、接辞に比べ、独立性の高いものである。

「語形変化をおこなう言語にあっては、語と語の間の文法関係は語形変化の中に含まれるから、そのような文法関係を助詞に負担させることは少ないが、孤立的な性格の言語は他の語との関係を示すためには、どうしてもそのための道具が必要となる。(『言語学辞典 第6巻 術語編』三省堂 p.728)」とあるが、サオ語では、接辞が一部その語形変化の役割を担っているが、一部はここで取り上げた小辞がその文法的機能の役割を担っている。

サオ語は語順が比較的自由であり、文中において主語や補語、状況語などの働きを持つ名詞は形態上明確な格の表示をされないが、*sa*、*a* は日本語の格助辞に相当するもので、文の主題を提示するのが主な用法である日本語の「は」にはサオ語の *sa* の一部が相当する。また、名詞と名詞を連結する働きを持つ格助辞「の」には、サオ語の *a* が相当する。ただし、サオ語の *a* は名詞と名詞だけには限らず、形容詞と名詞、動詞と名詞なども連結する。

- (1) *ya matan shara-piza kilha-kan-in-iza sa shmadia* (注 (1)、(2))
 if 暗い 夕方 探す-食べる -PF-Perf *sa* フクロウ
 夕方になったら、フクロウはどこかへ餌を探しに行った。
- (2) *sa tamalun ya itia ung-qtu-an sa kukulay sas-in*
sa オス if Exist 見つける -LF *sa* 虫 持って行く -PF
pa-kan shmadia wa huqi
 Caus- 食べる フクロウ *a* 子供
 オスは虫を見つけたら、子供に食べさせるために持って行く。

用例 (1) (2) のように、*sa* の機能は主格、対格をマークすることが主たる機能であると考えられるが、Wang (2004:319) に存在文にも *sa* が使われるとあるように、存在物もまたマークする。つまり、*sa* によってマークされるものは、主語と目的語および存在物を示す名詞が中心となる。*a* (*wa*) の機能は、用例 (2) にみられるように、語と語を連結する働きをする。

従来のサオ語の研究では、小辞について以下のような記述、研究がみられる。サオ語記略(1956:144-145)では、虚詞として *a*, *th (s)*, *tha (sa)*, *ya*, *tu* が提出されていて、*a* が主従関係(従主の場合もある)であるのに対し、*th (s)* と *tha (sa)* は非主従関係であり、主語と述語の場合にも述語と補語の場合にも使え、省略が可能である。*tu* は事実、あるいは事情を表すが、往々にして過去の事実を表し、「である」としても使われるとしている。

黄(2000:76-81)では、*a* は二語を連結する連結辞であり、*ti* は主格を、*tu* は受格を示すが、省略されることが多いとしている。特に *sa* に関してはとりあげていない。

Li(1978:592)では、*sa* を対格、主格マーカーとしているが、主格、対格のどちらかであるかはあいまいであり、実際にどちらにも現れるとしている。一方、Blust(2003:232)では、*sa* は主題のマーカーであり、文法的機能のバラエティーさを持って名詞節をマークするが、自動詞文の主語、受身文のシテ、時を表す名詞などに前接し、早く発話される場合は‘*s*’となり、省略されることも多いとしている。さらに、Wang(2004)は、格のマーカーではなく、様々な機能を備えた名詞節を導入する限定詞としており、自動詞の主語を導入したり、無生物主語をマークしたりして、主格、対格、斜格、能格等も含めたあらゆる句の前におかれるとしている。

tu に関しては、Li(1978:592)は、現実あるいは実際の出来事を表し、対格となると述べている。しかし、Blust(2003:231)はこれを支持しておらず、命令文の場合、ぶっきらぼうさを減らす緩和剤としての助詞の働きがあるとしながらも、その機能がはっきりしていないとしている。一方、Wang(2004:322)では、*tu* は様々な機能を持つとして、代名詞、親族用語、個人名をのぞく、後行する名詞節を導入する限定詞としている。

以上の先行研究で示された、これら小辞の文法的機能としての働きに対して、本稿では、これらの小辞がオプション的に使用されることから、その使用および文法的機能からのみではなく、日本語の格助辞と対照をしたうえで、小辞の持つ文法的意味からも詳細な分析を試みていくことにする。

3. 小辞 *ti*, *a*, *sa*, *tu* について

3.1 小辞

小辞 *ti* は人名詞の前におかれて、日本語の「さん」や「さま」などの敬称に相当する。基本的にはその人に対する敬意がある場合、または丁寧さを伴った表現となる場合に使用される。たとえば、昔物語などでは、登場人物に *ti* をつけることは少ないが、一文一文に対する翻訳によるサオ語の発話では、登場人物の名前に *ti* をつけて発話されることが多い。これは実生活のなかで実在する人物を想定しての発話となるためではないかと考えられる。

これまでの先行研究では *ti* は人固有名詞と親族用語につくとあるが、実際には親族用語につく用例はそれほど多くみられない。例としては、おとうさんやおじさん、おじいさんなど男性の年長者に対する呼びかけにも使われる *ama*、おかあさん、おばあさん等の呼称ともなる *ina* の用例のみである。つまり、どの親族用語にも *ti* がつくというわけではなく、親族関係のなかでも人生経験者として尊敬を受ける立場にある家族の中での年長者である男性、女性を指し示す *ama*、*ina* が固有名詞のように使われて、敬称がつけられているところでは考えた。

①人固有名詞

- (3) miakaiza ti shanti'az uka-iza h-in-adana a yaku wa shmadia
 考える ti シャンティアル NEG-Perf 飼う -Pst a 1s.Nom a フクロウ
 飼っていた私のフクロウはいなくなっらしいとシャンティアルさんは考えた。
- (4) ya mu-tusi ti Abish a taun miaqay pangka'un yakin
 if MV-そこ ti アビッシュ a 家 いつも ごちそうする 1s.Acc
 アビッシュさんの家に行くといつもご馳走してくれる。
- (5) ti Kilash lhay-an ti Ali sa fafuy
 ti キラシ あげる -LF ti アリ sa 豚
 キラシさんはアリさんに豚をもらう。

②親族名詞

- (6) kawi taqtaqin ti _____ ama
 Wood trns.chop Det. prsn father
 Father is chopping the wood (Blust 2003:971) 父は木を切っている。
- (7) ti _____ ina sa makan afu
 Det. prsn mother Det. Intrns.eat rice
 The one who is eating rice is Mother (Blust2003:295) 母はご飯を食べている。

3.2 小辞 *a*

a は二語を連結する小辞で、前接する語の語末が子音の場合は *a* で、母音の場合は *wa* となる。本稿のグロスではすべて *a* とする。

- (8) nak a hulus
 1s. Gen a 服 私の服
- (9) ina wa hulus
 母 a 服 母の服

a に二つの語を結びつける文法的機能があることは、これまでの先行研究からも明らかであるが、その連結された二語の意味的關係についてみていくと、この関係はまさに日本語の格助辞「の」と同じように様々な意味的關係を実現していることがわかる。

しかし、サオ語の小辞 *a* が日本語の格助辞「の」と異なる点は、名詞と名詞の連結だけでなく、形容詞と名詞、動詞と名詞を連結する文法的機能も持つことである。それは、日本語の用言が形態的に連体形をもつのに対し、サオ語の動詞や形容詞は後接する名詞を修飾するような接辞をもたず、そのため、小辞 *a* がそれらを結びつける働きを担っているのである。これは中国語における“的”や“得”の働きに近いといえなくもない。

3.2.1 名詞と名詞を連結

名詞と名詞を連結する *a* によって、二つの名詞は様々な意味的關係を実現する。

①所有・所属関係：人名詞 +a+ 所有物・所属物

- (10) ya mu-tusi ti Abish a taun miaqay pangka'un yakin
 if MV-そこ ti アビッシュ a 家 いつも ごちそうする 1s. Acc
 アビッシュの家に行くといつもご馳走してくれる。

所有者となる名詞が人代名詞の場合は属格となる。

- (11) mihu a azazak i-nay nak a taun
 2s. Gen a 子供 Loc-そこ 1s.Gen a 家
 あなたの子供は私の家にいる。

②位置関係：物名詞 +a+ 場所名詞、場所名詞 +a+ 物名詞

- (12) patashan i-say pagka wa fafaw
 本 Loc-そこ 机 a 上
 本は机の上にある。

- (13) patashan uka tu i-fafaw a pagka
 本 NEG-Exist tu Loc-上 a 机
 本は机の上にはない。

- (14) ya bariz-an a taun a Ali m-in-aka-tusi kariawan maku-na-nay
 if 隣り-LF a 家 a アリ AF-Pst-から-あそこ 埔里 MV-Red-ここ
 埔里から来たアリさんは隣に住んでいる。

また、次のように二つの場所の固有名詞を a で連結することで、場所の限定をする。

- (15) zintun a barabaw yanan sa thaw
 日月潭 a 徳化社 Pos sa サオ族(人)
 日月潭の徳化社にはサオ族がいる。

③親族関係：人名詞 + a + 人名詞

- (16) Kilah a azazak
 キラシ a 子供 キラシの子供

人代名詞の場合は属格となる。

- (17) nak a binanau'az antu la-ma-qitan
 1s. Gen a 女(娘) NEG 形容詞の程度を表す接辞(とても) -Sta- きれい
 私の娘はあまりきれいではない。

- (18) nak a ama i-taun
 1s. Gen a 父 Loc-家
 私の父は家にいる。

④種類の限定：限定する名詞 + a + 限定される名詞、限定される名詞 + a + 限定する名詞

- (19) ma-thuaw ka-daydaz-in /maqa mapa im-ba-babaw,
Sta- とても 面倒をみる -PF /Conj (だから) 互いに Red- 呼ぶ
numa sa ina wa shmadia un-ta-tal-an shmadia wa huqi
Conj sa 母 a フクロウ 一つ -Red-LF フクロウ a 子供
とてもよく面倒をみる。だから、互いに何度も呼んで、そして、母フクロウは子フクロウと一緒にいる。
- (20) shi-nay lipun a thaw m-usha-iza
Pst- ここ 日本 a 人 AF- 行く -Perf
日本人がここに来た。

⑤生産者と生産物の関係：生産者 + a + 生産物

- (21) ani yaku t-un-maza Kilash a lalawa
NEG 1s. Nom AF- 聞く キラシ a 話
私がキラシの話を聞くことはない。
生産者が人代名詞の場合は属格となる。
- (22) yaku m-in-aura mihu a lalawa
1s. Nom AF-Pst- 忘れる 2s. Gen a 話

⑥後続の名詞を指示：指示詞 + a + 名詞

- (23) ku-rubuz-i haya wa taun!
壊す -IMP この a 家
この家を壊せ!
- (24) ata tu i-lhungqu-i sa i-zay a pangka!
IMP-NEG tu Loc- 座る -IMP sa Loc- そこ a 椅子
そこのいすに座るな!

⑦後続の名詞の数量を限定：数量詞 + a + 名詞

- (25) Abish i-sahay makthin a tilhaz niwan tu malhus
アビッシュ Loc- そこ 十 a 時 NEG tu 寝る
アビッシュは10時にはまだ寝ないだろう。
- (26) la-tata wa patashan i-fafaw a pagka
数量接辞 - 1つ a 本 Loc- 上 a 机
一冊の本が机の上にある。
- (27) thuini mating-qaran mam-zai manasha wa quyash ma-qa-quyash mani
今日 Sta- 嬉しい AF- 言う たくさん a 歌 AF-Red- 歌う また
今日は嬉しいからいくらでも歌うことができる。

- (28) piza-iza wa furaz uka sa shmadia tu mu-apaw m-imbabaw
 何 -Perf a 月 NEG sa フクロウ tu MV- 出る AF- 呼ぶ
 何ヶ月も出てこないフクロウは呼びもしない。

3.2.2 形容詞と名詞を連結

aによって結びつけられている形容詞と名詞の関係は、前接する形容詞が後接する名詞の状態、様子、属性などを表す。

- (29) Abish m-in-aka-mankathi ka-ma-thu ma-ra'in a aniamin maku-na-nay
 アビッシュ AF-Pst- から - 遠く 持つ -AF Sta- 大きい a 荷物 MV-Red- ここ
 向こうから大きな荷物を持ったアビッシュがやってきた。
- (30) ani sa numa-numa wa rumfaz tu maqa ma-humhum kilha-kan-in
 NEG sa いろいろな -Red a 鳥 tu Conj Sta- 暗い 食べ物を探す -PF
 ming-kulhmuz mapa kalhus
 皆 一緒に 寝る
 いろいろな鳥は夜に餌を探しに行かないで、みんな寝る。
- (31) faqlhu wa rusaw shdu kan-in
 新しい a 魚 PV 食べる -PF
 新しい魚は食べることができる。

3.2.3 動詞と名詞を連結

動詞と名詞を連結している例も少なくなく、動詞と名詞で主語と述語の関係や、述語と目的語の関係を実現する。

①主語と述語の関係：動詞 + a + 名詞

- (32) mashintaz kilash mu-Taipak a huruy ti Abish
 一緒に キラシ MV- 台北 a 友達 ti アビッシュ
 キラシと一緒に台北に行った友達はアビッシュだ。
- (33) i-zay rumfaz a lhanaz zai-n a thaw fitfit
 Loc- そこ 鳥 a 名前 言う -PF a 人 山娘 (鳥の名前)
 その鳥の名前は山娘と人は言う。

②目的語と述語の関係：動詞 + a + 名詞

- (34) min-hiya-hiyaw yaku in-aura-n k-in-athu-n wa aniamin
 IC-LED- 早い 1s. Nom Pst- 忘れる -PF 持つ -Pst-PF a 荷物
 あわてて来たら忘れ物をしてしまった。
- (35) tilha f-in-ariw a fizfiz ma-thuaw ma-qitan kan-in
 昨日 買う -Pst a バナナ Sta- とても Sta- よい 食べる -PF
 昨日買ったバナナはおいしかった。

3.2.4 句や節と名詞を連結

名詞を修飾する連体節が a によって名詞と連結される場合もある。(36)は生産物(話)を、(37)は所有している所有物(鳥)を節が修飾している。

(36) ma-thuaw tundu shanti'az in-za-zai a lalawa

Sta- とても 聞く シャティアル Pst-Red- 言う a 話

(主語 + 述語) + a + 名詞

シャンティアルが言う話をよくきいた。

(37) miakaiza ti shanti'az uka-iza h-in-adana a yaku wa shmadia

考える ti シャンティアル NEG-Perf 飼う -Pst a 1s. Nom a フクロウ

(述語 + a + 主語) + a + 名詞

飼っていた私のフクロウはいなくなったらしいとシャンティアルは考えた。

3.3 小辞 sa

小辞 sa は主語や目的語、存在物となる物名詞(動物を含む人以外の名詞)を提示するが、さらに、名詞述語文の述語となる名詞や存在場所を提示する場合もみられた。

3.3.1 主語を提示

(38) ya matan shara-piza kilha-kan-in-iza sa shmadia

If 暗い 夕方 探す - 食べる -PF-Perf sa フクロウ

夕方になったら、フクロウはどこかへ餌を探しに行った。

(39) ungquruz m-alhus numa-wan thuini sa shmadia ya ma-lhias

隠れる AF- 寝る Conj 今 sa フクロウ if Sta- 明るい

もしまだ明るい時、フクロウは隠れて一日中ねる。

(40) ani sa numa-numa wa rumfaz tu maqa ma-humhum kilha-kan-in

NEG sa いろいろな -Red a 鳥 tu Conj sta- 暗い 食べ物を探す -PF

ming-kulhmuz mapa kalhus

皆 一緒に 寝る

いろいろな鳥は夜に餌を探しに行かないで、みんな寝る。

3.3.2 目的語を提示

主語を提示する場合に比べ用例は少ないが、sa は目的語も提示する。

(41) yaku k-m-in-an-iza sa afu

1s. Nom 食べる -AF-PST sa ご飯

私はすでにもうご飯をたべた。

一文の中で主語と目的語のどちらも *sa* が提示する用例 (42) もみられた。

- (42) sa tamalun ya itia ung-qtu-an sa kukulay sas-in
 sa (主語) オス if Exist 見つける -LF sa (目的語) 虫 持って行く -PF
 pa-kan shmadia wa huqi
 Caus- 食べる フクロウ a 子供
 オスは虫を見つけたら、子供に食べさせるために持って行く。

用例 (43) のように、主語であり目的語でもある兼語の場合にも小辞 *sa* がつく場合があり、この場合は、*sa* が主語を提示しているのか、目的語を提示しているのかははっきりしない。

- (43) numa p-usha-n shanti'az pu-tusi-n taun a tanariqush
 Conj Caus- 行く -PF シャンティアル Caus- そこ -PF 家 a 裏
 /numa sa shmadia zai-n shanti'az yaqay mu-na-nay
 /Conj sa ふくろう 言う -PF シャンティアル いつも MV-Red- 来る
 「言う」の目的語・「来る」の主語
 家の裏の山に (フクロウを) 連れて行って、どこにいても必ずこっちに帰りなさいとシャンティアルはフクロウに言った。

3.3.3 存在物、所有物を提示

存在文 (itia) や所有文 (yanan) の場合では、存在物、所有物は *sa* によって提示される。

: itia + *sa* + 存在物、yanan + *sa* + 所有物

- (44) itia sa nak a tuali
 Exist sa 1s.Gen a お金
 私のお金がある。
- (45) antu shana -tima ya ma-nasha-iza qamishan mashtay yanan sa shiz
 NEG 誰 if Sta- 多い -Perf 年 一緒に 持つ sa 病気
 誰だって年を取れば具合の悪いところも出てくる。

存在文、所有文は否定存在動詞 *uka* (～がない) によって存在・所有否定文となり、この場合も存在物、所有物は *sa* によって提示される。: 所有者 + *uka* + *sa* + 所有物 / 存在物

- (46) yaku uka sa tuali i-taun
 1s.Nom NEG.Exist sa 金 Loc- 家
 私は家にお金がない。
- (47) yaku uka sa taun
 1s. Nom NEG.Exist sa 家
 私は家がない。

存在物が *uka* の後に来る場合は、*sa* がその存在物に前接するが、(48) のように省略される場合も多い。

- (48) uka nak a taun i-taipak
 NEG.Exist 1S.Gen a 家 Loc- 台北
 私の家は台北にない。

3.3.4 その他

①場所名詞を提示

小辞 *sa* が場所名詞を提示する用例は非常に少なく、手持ちの資料では二例のみであった。

- (49) miapariz a taun tima sa utu painan
 隣 a 家 誰 sa そこ たぶん
 隣の家に誰かいるようだ。
- (50) uka sa lhqaribush sa i-Lalu
 NEG. Exist sa 生き物 sa Loc- ラルー島
 ラルー島には生き物がいない。

②名詞述語文の述語を提示

①と同様、*sa* が名詞述語文の述語となる名詞を提示する用例は非常に少なかった。

- (51) haya sa nak
 この sa 1s. Gen
 これは私のだ。
- (52) haya i-nay sa pash-tubu-an
 この Loc- ここ sa トイレ
 こっちがトイレだ。

③形容詞と動詞を連結

この用例もほとんど見られなかった。

- (53) ani haya wa fizfiz ma-qitan a kan-in
 NEG この a バナナ Sta- いい a 食べる -PF
 このバナナはおいしい、ということはない。

3.4 小辞 *tu*

先行研究では、*tu* の文法的機能について Wang (2004:322-326) が最も詳しく分析しているが、Wang は名詞節を導入する限定詞 (determiner) としている。また Blust (2003:231) では、その働きは様々であり、命令否定辞 *ata* に後接した場合はぶっきらぼうさを緩和する働きがあるが、その機能についてはまだ確定できているとは言い難いとしている。

本稿では、*tu* は句や節、文をひとまとまりのものとして提示することがその基本的な機能であり、同様に否定辞に後接する場合も、その否定辞が *tu* の提示する句や節、文をひとまとまりのものとして否定していると考えた。

3.4.1 時や場所を提示

時や場所を表す語に前接して、文全体にその時や場所が関わっていることを示す。

- (54) nak a hulus ma-tuvu tu ikahi ma-qalhiw-iza
 1s.Gen a 服 Sta- 濡れる tu ちょうど今 Sta- 乾く -Perf
 濡れていた服が乾いている。
- (55) qalush-an ma-thuaw lipun ma-daydaz thaw tu isisua
 わける -LF Sta- とても 日本 Sta- かわいがる サオ族 tu その時
 その時日本人はサオ族をかわいがる。
- (56) tu mashanpanaq-iza qarman-iza thaw a in-in-thaw-an
 tu 戦争のとき -Perf 悪くなる -Perf サオ族 a 生活
 戦争が始まってサオ族の生活が悪くなった。
- (57) thaw tu kahiwan maqa thaw tu i-taringkuan manasha mia-sún
 サオ族 tu 昔 Conj サオ族 tu Loc- タリンクワン たくさん 一緒
 時を表す語に前接 場所を表す語に前接
 昔、サオ族はタリンクワンにたくさんみんな一緒にいた。

3.4.2 節を提示

複文構文の場合の主節、あるいは従属節をひとつのまとまったものとして *tu* が提示する。

- (58) yaku tu pashi-azazak /qusaz-in dai
 1s. Nom tu CAUS- 子供 / 雨が降る -PF そうだ
 私が生まれたときは雨が降っていたそうだ。
- (59) yaku tu mu-tusi Qariwan ki-na-kawash isa turu wa furaz mu-tant
 1s. Nom tu MV- あそこ 埔里 去年 ここ 三 a 月 MV- そこ
 私が埔里へ行ったのは去年の三月です。

3.4.3 文を提示

①引用や考えを述べる文をひとまとまりのものとして提示

- (60) shrizan m-zai tu ina wa lalawa tmaza
 シャリザン AF- 言う tu 母 a 話 聞く
 シャリザンはシャンティアルにお母さんの話を聞きなさいと言う。
- (61) yaku ma-fazaq ma-qa-quyash tu thaw a quyash
 1s. Nom Sta- 知る Sta-Red- 歌う tu サオ族 a 歌
 私はサオ族が歌う歌を知っている。

②文頭で *numa+tu* の形で文をひとまとまりのものとして提示

numa は連続する発話の中で、話しはじめに置かれるもので、日本語の「さて、ところで、ええと」などに相当する。この *numa* に *tu* が後接する。

- (62) miarain mangqtu-qtu /numa tu pashukazay itiza shmadia
 いつも 思う -Red / 接 tu 長い時間 戻る フクロウ
 いつもフクロウのことを考えている。そして、フクロウは戻った。

- (63) numa Abish tu m-ara sa binanau'az maqthin tanathu wa qamishan
 Conj アビッシュ tu もらう -AF sa 女 十 九 a 歳
 それから、アビッシュは19歳でお嫁さんをもらった。
- (64) numa tu k-m-in-an-iza kunshashanu
 Conj tu 食べる -AF-Perf 朝ご飯
 /mashtay-iza mapa-sa-lhalhahi a-mu-shuqish-iza
 /一緒に -Perf 背負子を持つ irr-MV- 戻る -Perf
 それから、朝ごはんを食べて、みんな一緒に背負子を持って戻った。

3.4.4 否定辞に後接

否定辞の niwan, niza, ata, uka に *tu* が後接する。

① 否定辞 niwan + *tu* + 動詞 (まだ～しない)

- (65) niwan tu a buqnur ihu
 NEG tu Irr おこる 2s.Nom
 まだ怒っていない。
- (66) niwan tu a ma-qusaz
 NEG tu Irr Fut- 雨が降る
 まだ雨が降っていない。
 ただし、*tu* が省略されることもある。
- (67) niwan yaku mi-m-riqaz ihun
 NEG 1s. Nom Sta-AF- 見る 2s.Acc
 まだあなたを見ていない。

② 否定辞 niza + *tu* + 動詞 (もう～しない)

- (68) thuini niza tu m-riqa-riqaz lhqa ribush a qnuan
 今 NEG tu AF-Red- 見る 大きい鹿
 私たちはもう鹿を見ない。
- (69) niza tu t-mu-barumbun
 NEG tu AF- 雷がなる
 もう雷がならないだろう。
 ただし、*tu* が省略されることもある。
- (70) a niza yaku a mu-nay
 Irr NEG 1s.Nom Irr MV- 来る
 もう私は来ない。

③ 否定辞 ata + *tu* + 動詞の命令形 (～するな)

命令文の場合、動作行為者の多くは二人称になるため省略されることが多い。また、(73)のように、*tu* が省略されることもある。

- (71) ata tu kan-i fizfiz!
 NEG・IMP tu 食べる -IMP バナナ
 バナナを食べるな!
- (72) ata tu ilhungqu-i sa i-zay a pangka!
 NEG・IMP tu Loc-座る -IMP sa Loc-そこ a 椅子
 そこのいすに座るな!
- (73) ata riqaz-i haya wa binanau'az!
 NEG・IMP 見る -IMP この a 女
 この女の人を見るな!

④否定辞 *ani* + 動作主体 + *tu* + 動詞 (～しない)

否定辞 *ani* の場合、*ani* と *tu* の間に動作主体者が挿入される。

- (74) anunin ka puhiaw pulha ani shanti'az tu miku-pulha
 何をする 疑問詞 早く 離す NEG シャンティアル tu 好き - 離す
 早く離しなさいと言うけれど、シャンティアルは離したくない。
- (75) ani sa numa-numa wa rumfaz tu maqa ma-humhum kilha-kan-in
 NEG sa いろいろ -Red a 鳥 tu Conj Sta- 暗い 食べ物を探す -PF
 ming-kulhmuz mapa kalhus
 皆 一緒に 寝る
 いろいろな鳥は夜に餌を探しに行かないで、みんな寝る。
- (76) ani yaku tu a mu-tantu
 NEG 1s. Nom tu Irr MV- 行く
 私はいきたくない。
- (77) ani yaku tu lhay ihun sa tuali
 NEG 1s. Nom tu あげる 2s. Acc sa 金
 私はあなたにお金をあげない。

tu が省略される場合もある。

- (78) ani yaku k-m-an shawiki
 NEG 1S. Nom 食べる -AF ビンロウ
 私はビンロウを食べない。

⑤ 否定辞 *uka* + *tu* + 場所 (～がない)

存在文・所有文では後続する存在物・所有物に小辞 *sa* が置かれるが、所在文では後続する所在場所を提示するために、小辞 *tu* が置かれる。

- (79) mihu a azazak uka tu i-nay nak a taun
 2s. Gen a 子ども NEG. Exist tu Loc- ここ 1s. Gen a 家
 あなたの子どもは私の家にはいない。

- (80) patashan uka tu i-fafaw a pagka
 本 NEG. Exist tu Loc- 上 a 机
 本は机の上にはない。

また、*uka* には *sa* と *tu* が共起する場合があります、その場合は *sa* が存在物をマークし、*tu* が文全体をマークすることで、*uka* がその文全体にかかることを示しているのではないかと考えられる。

- (81) piza-iza wa furaz uka sa shmadia tu mu-apaw m-imbabaw
 何 -Perf a 月 NEG. Exist sa フクロウ tu MV- 出る AF- 呼ぶ
 何ヶ月も出てこないフクロウは呼びもしない。

⑥ 否定辞 *antu*+ 動詞

サオ語には、以上の否定辞のほかに後続する動詞、形容詞を直接否定する *antu* がある。*antu* と *ani* の違いについては、新居田 (2007:368-369) で、「*ani* は後続する文全体を否定するものであり、必ず文頭に用いられる。(中略) *antu* は後続する名詞句、形容詞句、動詞句などを否定する。」と述べたが、*ani* は基本的には文全体を否定するために文全体をマークする *tu* が共起するが、*antu* は後続の動詞句のみを否定するため、*tu* が共起しないと考えられる。

- (82) tilha yaku antu m-in-atipish ihu(ihun)
 昨日 1s. Nom NEG AF-PST- ぶつかる 2s. Nom(Acc)
 昨日、私はあなたにぶつからなかった。

- (83) yaku antu a pishqati sazum
 1s. Nom NEG Irr 温める 水
 私は水を温めない。

- (84) haya fatu antu ma-brith
 この 石 NEG Sta- 重い
 この石は重くない。

4. おわりに

これまでの先行研究ではサオ語の小辞 *ti*、*a*、*sa*、*tu* の文法的機能のみについて論じられてきたため、その機能のあいまいな部分について明らかにすることができなかった。しかし、本稿では文法的機能にくわえて、文法的意味までその考察の範囲を広げて分析をし、それぞれの文中での働きおよびその使用について明らかにした。

本稿で分析に用いた物語のように、媒体言語による影響を全く受けていない自然発話をもあわせて資料とすることにより、より自然なサオ語本来の姿を明らかにすることができたといえるだろう。今後さらに自然発話による資料をもとに、消滅の危機に瀕しているサオ語のありのままの姿を記述、分析していくことでサオ語の保存の一役を担いたいと考えている。

小辞 *ti*, *a*, *sa*, *tu* の文法的機能および文法的意味についてまとめると次のようになる。

	文法的機能	文法的意味
ti	人名詞に前接（主に人固有名詞）	敬意
a	二語の連結 名詞＋名詞、指示詞＋名詞、数量詞＋名詞、 動詞＋名詞、形容詞＋名詞、句・節＋名詞 など	所有・所属関係、位置関係、親族関係、種類 の限定、生産者と生産物の関係、指示関係、 数量の限定、主述関係、目的語と述語の関 係、物の状態・様子・属性など
sa	物名詞に前接	主語、目的語、存在物を提示
tu	時・場所を表す語に前接、節・文に前接、否 定辞に後接	ひとまとまりとしての句、節、文を提示

【註】

(注1)

本稿で用いる表記は、子音は p, b, m, f, t, d, n, th(c)[θ], s, z[ð], lh[l], l, r, sh[ʃ], k, ng(g)[ŋ], q, h, y, w, ' [glottal stop] である。母音は /a, u, i/ の三つだが、/i/ は /q, r/ と連続するとき [e], /u/ は /q, r, ng/ と連続するとき [o] となる。/b, d/ の前と、語頭・語尾の母音は glottal stop が現れるが、本稿では、表記を省略した。アクセントは基本的には後ろから二つ目の母音におかれるが、いちばん最後の母音におかれる場合もある。

(注2)

本稿で使用した略記号は以下の通りである。AF:actor focus (シテ焦点), PF:patient focus (ウケテ焦点), LF:locative focus (バシヨ焦点), NEG:negative (否定), PST:past (過去), CAUS:causative (使役), IMP:imperative (命令), Nom:nominative (主格), Acc:accusative (対格), gen:genitive (属格), s:single (単数), pl:plural (複数) 1:First person (1人称), 2:second person (2人称), 3:third person (3人称), Irr:irrealis (非実現), sta:stative affix (状態接辞), Fut:future (未来接辞), MV:motion verb (移動接辞), loc: locative affix (場所接辞), perf:perfective aspect (完了), Exist:existence (存在辞), IC:inchoative affix (起動接辞), Red:reduplication (重複), Conj:conjunction (接続辞), PV:potential verb (可能動詞)。

【参考文献】

(中国語文献)

李方桂、陳奇祿、唐美君 (1956) 「サオ語記略」『国立台湾大学考古人類学刊』7:137-166

黄美金 (2000) 『サオ語参考語法』(台湾南島語言 4) 台湾：遠流出版公司。

(英語文献)

Li, Paul jen-Kuei (1978) The case-marking systems of the four less-known Formosan languages. In S.A. Wurm & Lois Carrington, eds., *Second international Conference on Austronesian linguistics: proceedings, Fascicle 1*:569-615.

Blust, Robert (2003) *Thao Dictionary*. Taiwan: Institute of Linguistics Academia Sinica.

Wang, Shan-Shan (2004) An ergative view of Thao syntax. Unpublished doctoral dissertation. University of Hawaii.

(日本語文献)

- 安部清哉・新居田純野 (2007) 『石阿松氏『サオ語語彙 4000』—仮名が記録した太平洋の“危機言語” —』 学習院大学東洋文化研究所調査研究報告 53
- 安部清哉・長嶋善郎・新居田純野 (編)、土田滋 (監修) (2008) 『サオ語 (台湾・邵語) 語彙 (英語・日本語索引付) —サオ語研究資料 II—』 学習院大学東洋文化研究所調査研究報告 54
- 新居田純野 (2005) 「存在動詞における「遠 / 近」「可視 / 不可視」オーストロネシア語 (サオ語) の場合」『国文学解釈と鑑賞』 1 : 164-173. 東京 : 至文堂.
- 新居田純野 (2007) 「サオ語における evidentiality (証拠性) とアスペクト」『大葉大学応用日語学報』 1 : 136-155.
- 新居田純野 (2007) 「サオ語 (台湾中部) の否定表現」『東洋文化研究』 9 : 1-25. 学習院東洋文化研究所
- 新居田純野 (2007) 「サオ語の兼語構造について」『学習院大学東洋文化研究所調査研究報告』 53 : 345-350.
- 新居田純野 (2007) 「サオ語 (台湾) における焦点接辞と二項述語階層」『他動性の通言語的研究』 : 66-78. 東京 : くろしお出版.
- 新居田純野 (2008) 「日本語との対照におけるサオ語の時間表現—テンス・アスペクト—」『対照言語学研究』 17 : 21-49.
- 新居田純野 (2008) 「日本語との対照におけるサオ語の授受表現」 学習院大学『東洋文化研究』 10 : 1-27.
- 新居田純野 (2008) 「サオ語 (台湾) における現場指示表現—日本語との対照から—」 学習院大学『人文』 6 : 213-231.
- 新居田純野 (2008) 「日本語との対照におけるサオ語の可能表現」『大葉大学応用日語学報』 2 : 197-223.
- 新居田純野 (2008) 「サオ語 (台湾中部) の語順」『長崎外大論叢』 12 号 : 59-70
- 新居田純野 (2009) 「サオ語の複文構造」『長崎外大論叢』 13 号 : 115-130

[付記] 本稿は 2010 年 -2012 年度文部科学省科学研究補助金 (基盤研究 C 課題番号 22520452 『危機言語サオ語 (台湾中部) の記述研究及び仮名で記録されたサオ族伝承物語の分析』) の助成を受けている研究に基づく。